

中国最古の棋譜

香川忠夫

I. 問題の所在

現存する中国最古の棋譜については、囲碁史に関心を持つ人にとっては興味ある問題であろう。然し、最古の棋譜の確定は容易ではない。

近年中国でも囲碁史への関心が高まり、『中国囲碁史』の刊行も散見されるが、最古の棋譜について管見の限りでは正面から論じた文献は見当たらない。

中国最古の棋譜を選定する場合、棋譜を採録した最古の棋書とされている『忘憂清楽集』¹⁾を検策しなければならない。同書は北宋末に李逸民が編纂した棋書であり、「忘憂清楽」の題名は徽宗の棋詩に拠っている。

同書が棋譜を採録した最古の棋書であることは定説であるが、「中国最古の棋譜」を選定するに際し、同書に遺漏した棋譜の有無を検討することは、必須の課題である。

中国では歴代の正史等の史書に囲碁の記事が少なからず登場する。正史とは王朝別の紀伝体の歴史書であり、清の乾隆年間(1736~95)に編纂された『四庫全書』は、『史記』から『明史』までの24の歴史書に正史という名称を付した。以後正史という呼称が定着し、各王朝の公的歴史書と見做されるようになった。

囲碁に関する記事は、24の正史中で『遼史』を除く23の正史に記載がある。この中で棋書名が記載されたのは、『隋書』²⁾が最初である。『隋書』以降の歴代正史も概ねこれを踏襲している。

尚、正史に次ぐ歴史書にも囲碁の記事が多く登場する。一例を挙げれば、『漢紀』(後漢 荀悦撰)、『後漢紀』(東晋 袁宏撰)にも囲碁記事がある。

そこで先ず、中国歴代の正史等の史書に記載されている棋書や囲碁記事を手掛りとして棋譜を見出すことに努める。

次に、『忘憂清楽集』中の棋譜を検討する。同書には三国呉の孫策³⁾対呂範⁴⁾の対局

譜が記載されており、以下西晋から北宋までの棋譜が続くので、棋譜の選定は極めて容易であると思われる。

然し、中国には後世の人が古棋譜を創作する事例が多く、古棋譜を単純に且つ軽々に信用することにはリスクがあり、他の文献から真贋を総合判定する必要がある。

就中、碁盤の規格が漢代には17路盤であったものが、唐代には既に19路盤に変更されていたという史実がある。

そこで本稿では次の順序で最古の棋譜を求めることとする。

- (1) 中国歴代の正史等に記載された棋書目録や囲碁記事から『忘憂清楽集』に遺漏した棋譜を求める。
- (2) 『忘憂清楽集』所収の棋譜の中で唐以前の3局の内、対局者のはっきりしている2局について、その信憑性を検討する。伝説に立脚した「爛柯図」については、時期が特定されていないので別に検討する。
- (3) 碁盤の規格が17路盤から19路盤に変更された時期を文献上から推定し、当該棋譜とその時期の碁盤規格の整合性を調べる。
- (4) (1)～(3)の検討で最古の棋譜が見出せない場合、唐代棋譜について、対局の時期、対局者の実在性等を検討する。
- (5) 「爛柯図」について伝説が構成された時期を解明し、その上に立って棋譜の作成された時期を推定する。

以上の検討により、最古の棋譜を推定することが出来るものと考ええる。

Ⅱ．中国の正史等に見る棋書目録

中国の正史で王朝所蔵の図書目録を収録したものは『漢書』が最初であるが、以後の正史はこれを欠いた。図書目録は『隋書』に至って復活したが、『旧五代史』『新五代史』『遼史』『金史』はこれを欠いている。

尚、棋書目録は『隋書』が初出であり、以後の正史は概ねこれを踏襲している。宋以降は正史以外の史書にも棋書目録が登場してきた。

中国では「目録学」と称する学問がある⁵⁾。これは書籍の分類方法の研究から生まれたものであり、その起源は前漢の劉向の「七略」に遡る。宋代には目録学の専門書が刊

中国最古の棋譜

行され、これにも棋書目録が収録されるようになった。

本項の目的が最古の棋譜を求めることであるので、『隋書』から唐宋時代の史書に絞って検索する。

(1) 『隋書』巻34「経籍志」

「碁勢十卷 沈敞撰・碁勢十卷 二卷成 王子冲撰・碁勢八卷・碁図勢十卷・碁九品序録一卷 范汪等註・碁後九品序一卷 袁遵撰・困碁品一卷 梁武帝撰・碁品序一卷 陸雲撰・碁法一卷 梁武帝撰。」

王子冲は北齊の第4代武成帝の王子高冲である。唐の張彦遠の『歴代名画記』巻8の北齊画家楊子華の項に、「時有王子冲・善棋通神・号為二絶。」とあり、王子高冲が困碁の名手であったことが判る。

范汪は東晋の官僚・政治家で、好棋家であった。『晋書』巻75にその評伝があるが、困碁に関する記事はなく、困碁については、『世説新語』「方正第五」にある⁶⁾。

陸雲は梁の後期の官僚で好棋家として知られている。評伝は『梁書』巻50にある⁷⁾。沈敞・袁遵については不詳である。

『隋書』に記載された棋書は悉く煙滅して現存しない。但し、『敦煌石室本碁経』⁸⁾の中に「碁法」と題する一篇があり著者名を欠くが、上記「碁法」一卷である可能性はあるものの、推測の域を出ない。

(2) 『旧唐書』巻47「経籍志」⁹⁾

「碁勢六卷・碁品五卷 范汪等註・困碁後九品序録一卷・竹苑仙碁図一卷・碁評一卷 梁武帝撰。」

「碁評」一卷が『敦煌石室本碁経』の中にある「碁評要略」梁武帝と同一と考えられるが、他の棋書は亡逸している。尚、『敦煌石室本碁経』には棋譜はない。

(3) 『新唐書』巻59「芸文志」¹⁰⁾

「范汪等註 碁品五卷・梁武帝 碁評一卷・碁勢六卷・困碁後九品序録一卷・竹苑碁図一卷・王積薪金谷園九局一図一卷・開元待詔韋珽碁図一卷。」

ここでは、玄宗朝の棋待詔韋珽と王積薪の棋書が登場する。棋待詔は玄宗が創始した制度で、その設置については北宋の司馬光の編年体史書『資治通鑑』に記事がある¹¹⁾。

棋待詔とは囲碁の名手を囲碁専門の侍従として翰林院に常駐させる制度である。韋珽は開元年間（710～41）即ち玄宗朝前半の棋待詔であるが、その経歴等は不詳である。王積薪は天宝年間（742～56）玄宗朝後半の棋待詔であり、いくつかの逸話も残っている伝説的な強豪である。

『新唐書』に記載された棋書の中では、梁武帝の「碁評」一巻を除いてすべて亡逸している。

(4) 『通志』巻69「芸文略」第7¹²⁾

「碁勢四巻 見隋書經籍志。又七巻 湘東太守徐寵。又十巻 王子冲撰。又十巻 沈約撰。碁後九品序一巻 袁遵。 囲碁九品序五巻 范汪等撰。 囲碁勢二十九巻 晋趙王倫舍人馬朗等撰。 建元永明碁品二巻 宋 □恩□撰。 九品序録十一巻 范汪等撰。 天監碁品一巻 梁 柳惲。 梁武帝 碁評一巻。 梁武碁法一巻。 竹苑仙碁図一巻。 碁図一巻 韋珽撰。 碁訣一巻。 囲碁品一巻 梁武撰。 碁要訣一巻。 弈碁経一巻。 金谷園九局図一巻。 唐開元中王積薪馮汪二人於太原□陳九言金谷第弈碁為金谷園図。 金谷園九局譜一巻 南唐 徐鉉撰。 鳳池図一巻 王積薪撰。 碁本一巻。 王延昭碁論一巻。 劉仲甫忘憂集一巻。 角局図一巻。 応機子碁勢重元図一巻。 諸家精選新勢一巻。 太宗皇帝碁図一巻。 国手綱各一巻。 囲碁故事一巻。 右弈碁三十一部 九十三巻。」

『通志』は中国の神話時代から隋までの通史であるが、「芸文略」には隋以後の文献も含まれ、特に棋書では唐以後のものも見られる。

収録された棋書は質量ともに正史を上回る。特に王積薪の「金谷園九局図」については、対局相手、対局場所や、その時期が開元年間と判明したことは成果である。但し、『通志』に収録されたこれだけの棋書が梁武帝の「碁評一巻」を除いて全く現存していない。

尚、最近王積薪の「鳳池図」と題する棋譜が、中国の棋書に掲載されているが、その信憑性については、後に論ずる。

(5) 『宋史』巻207「芸文志」160「芸文」6¹³⁾

「唐績 碁図五巻。 金谷園九局譜一巻 王積薪等。 碁訣三巻 碁勢図并図一巻 徐鉉。 碁図義例一巻。 碁勢三巻。 楊希粲 四声角図一巻。 又雙泉図一巻。 玉溪図一巻。 蔣元吉等 碁勢三巻。 太宗 碁図一巻。 局譜一巻。 韋珽 碁図一巻。 弈碁経一巻。 碁経要略

一卷。」

『宋史』の編纂は元代であるので、唐以前の棋書・棋譜は『通志』編纂時より更に減少している。北宋時代の徐鉉の『棊図義例』以外は残っていない。

(6) 『崇文総目』巻33¹⁴⁾

「棊訣一卷 通志略不著撰人・葛法棊経一卷 原釈 闕見天一閣鈔本・棊術要訣一卷 原釈 闕見天一閣鈔本・侗按通志略作棊訣不著撰人・弈棊経一卷 通志略宋志並不著撰人 原釈 闕見天一閣鈔本・金谷園九局譜一卷 原釈 闕見天一閣鈔本・侗按日本九局作九曲局 今據諸家書目校刪曲字通志略徐鉉撰宋志不著撰人・金谷園九局図一卷 王積薪撰 原釈 闕天一閣鈔本・侗按通志略王積薪馮汪撰・棊図義例 徐鉉撰・棊勢図一卷 侗按宋志棊勢論并図一卷不著撰人・棊勢一卷 侗按隋志棊勢四卷八卷並不著撰人又有沈敞十卷王子冲十卷又隋唐志唐志並六卷宋志三卷亦不著名氏・棊図一卷 侗按通志略韋珽撰宋志作韋珽又有太宗棊図亦一卷。」

『崇文総目』は北宋の王堯臣等が編纂した目録学の専門書で、全66巻の大部なものであったが、南宋の鄭樵が『通志』を編纂した際その繁を嫌って削り、南宋末から世になくなった。清になって朱彝尊が天一閣の蔵本から再現し、銭東垣が註を作成した。上記の内容も(1)～(5)までの史料を大きく越えるものではない。北宋時代の『棊訣』『棊図義例』以外は全て亡逸している。

以上『隋書』から『崇文目録』までの正史・通史・目録学の専門書等を検索し、唐以前の棋書から最古の棋譜を見出す努力を試みた。この結果、これらの文献に記載された棋書は殆どが亡逸して現存せず、その中から唐代や唐以前の棋譜を見出すことは不可能であった。

三国時代から南北朝時代は囲碁の普及した時代であり、南朝宋の文帝や梁の武帝のような囲碁好きの皇帝もいて、正史中に囲碁の記事が比較的多い。

清の鄧元鋹の編纂した『歴朝弈事輯略』¹⁵⁾は歴代の正史から囲碁に関する記事を抽出した史料集であるが、これを見ても上記の事実が裏付けられる。

それにも拘わらず、唐以前の棋譜が全く伝承されていないのは何故か。この理由としては、次の二つの事柄が考えられる。

第一は、後漢の蔡倫が発明した紙は南北朝時代では貴重品であり、囲碁の対局毎にその棋譜を採録する慣習が確立されていなかったものと考えられる。

南朝宋の元嘉年間（424～59）は囲碁好きの文帝の治世であり、中国歴代の名手王抗やこれに次ぐ強豪褚思莊・夏赤松がいて、文帝の愛顧を受けていた。

『南齊書』巻46「蕭惠基伝」¹⁶⁾に次の記事がある。

「当時能碁人琅邪王抗第一品、吳郡褚思莊会稽夏赤松並第二品、赤松思速於大行、思莊思遲於鬪碁。宋文帝世、羊玄保為会稽太守、帝遣思莊入東與玄保戲、因製局函遺於帝前覆之。」

羊玄保は南朝宋の高級官僚で『宋書』巻54「羊玄保伝」¹⁷⁾によると棋力は第三品、文帝の囲碁の相手をつとめているが、文帝より棋力が上であった。文帝は羊玄保の棋力を知るため、褚思莊を羊玄保の赴任先へ派遣し、両者の対局譜を作成させ御前で発表させた。このような記事が正史に記載された事から、当時棋譜を採録する慣習が定着していなかったことが窺われる。

第二は、この時代は王朝の交替が多く、その都度多くの文物が煙滅したことが挙げられる。

Ⅲ．『忘憂清楽集』所収の唐以前の棋譜の検討

『忘憂清楽集』上巻には19局の実戦譜が収録されている。その内訳は唐以前が3局、唐代が3局、北宋が13局である。従って中国最古の棋譜は唐以前の3局の中にある可能性が高いと考えられる。

ここではこの3局の中で伝説に拠った「爛柯図」を除く2局について、正史その他の文献から対局に関する記述を検索し、その棋譜の信憑性を検討する。

(1) 孫策詔呂範弈碁局面

孫策（175～200年）は三国呉の孫権の兄であり、父孫堅の死後呉国の基礎を作った。呂範は孫策の武将で孫策の死後弟孫権に仕え、呉の重臣となった。

三国時代の正史『三国志』「呉書」は西晋の陳壽（233～97年）の編纂によるが、簡潔で正確な記述は評価が高い。陳壽の『三国志』本文には孫策対呂範の囲碁対局の記述はない。南朝宋の裴松之（372～451年）は文帝の命を受け、多くの文献を引用して『三国志』に註釈を加えた。引用文献の大半が亡逸しているため、裴松之の註は「裴註」と呼

ばれて尊重されている。「裴註」の中に東晋の虞溥の著わした『江表伝』があるが、この中に孫策対呂範の囲碁対局の記事がある。然し、『江表伝』も亡逸している。「呉書」第11「呂範伝」中の『江表伝』の孫策と呂範の対局記事を次に採録する。

「策従容独與範碁．範曰．今將軍事業大．士衆日盛．範在遠聞．綱紀猶有不整者．範願暫領都督．因論軍旅。」

この棋譜は現在と同じ19路盤で記録されており、互先ながら対角線の星に黑白2個ずつ石を置いた「事前置石制」である。現在とは逆に白先で打たれており、技倆の上の者又は身分の高い方が黒を持ったと考えられる。

(2) 晋武帝詔王武子弈碁局

西晋の武帝司馬炎(236~90年)¹⁸⁾は三国魏の重臣司馬懿の孫、司馬昭の子である。父の死後その爵位を継ぎ、265年三国魏を滅ぼし西晋を創立して初代皇帝となった。280年三国呉を滅ぼし、中国を統一した。王武子は本名王濟、武帝の娘常山公主と結婚しており、武帝の娘婿にあたる。

武帝が囲碁の対局を行ったことは、『晋書』巻34「杜預伝」に次の記述がある。

「時帝與中書令張華圍碁而預表適至．華推枰斂手曰．陛下聖明神武．朝野清晏．国富兵強．号令如一．吳主荒淫驕虐．誅殺賢能．今討之司不勞而定．帝乃許之。」

西晋では呉の討伐をめぐる、重臣の間で主戦論、反対論が拮抗して武帝が決断出来なかった。そこで主戦派の張華と杜預が提携し、武帝が張華との囲碁の対局の間に武帝に決断させた。

武帝と王濟の対局については、東晋の裴啓の著わした『語林』に次の記事がある¹⁹⁾。

「王武子與武帝圍碁．孫皓看．王曰．孫歸命何以好剥人面．皓曰．見無礼于其君者．則剥其皮．乃拳碁局．武子伸脚在局下．故譏之。」

孫皓は三国呉の最後の君主で西晋の討伐を受けて降伏したが、残虐な君主として知られていた。

唐以前の3局中で対局者のはっきりしている2局は、いずれも史実に核を持っている。然し、史実のあることと棋譜の真偽は別の問題であるので、次に視点を変えて碁盤規格変更の時期を考察する。

Ⅳ．17路盤から19路盤へ移行した時期について

古代中国では碁盤が17路であったが、これを立証する文献は『文選』に収録された三国呉の韋昭（200～73年）の『博弈論』に付された唐の李善（～689年）の註である。博は六博、即ち中国古代の双六であり、弈は囲碁である。六博については、寺田隆信氏の研究がある²⁰⁾。

呉の宮廷では博弈、即ち双六と囲碁が流行したので、太子の孫和は韋昭に命じて博弈に耽溺することの弊害を論ずる文章を作成させた。これが『博弈論』であり、『三国志』「呉書」第20韋昭伝には原文のまま収録されている。

6世紀前半、梁の昭明太子蕭統は、周から梁までの作家百数十名の詩文約800編を集めた『文選』全30巻を編纂した。『博弈論』は『文選』に収録された。

『文選』は梁以降隋唐にかけて大いに読まれ、かなりの人が註を付した。その註中、資料の博搜で優れたものが唐の李善の註で、『博弈論』の代表的な註の地位を占めた²¹⁾。

『博弈論』中の弈の説明で「枯碁三百」の句がある。李善はこれに「邯鄲淳芸経曰・碁局縦横十七道・合二百八十九道・白黒碁子各一百五十枚。」と註を付した。枯碁は木製の碁石と推測出来る。邯鄲淳は後漢から三国魏にかけての人物であり、文才をもって知られた。邯鄲淳の文章は、清の嚴可均の編纂した『全上古三代秦漢三国六朝文』中の「全三国文」巻26に「投壺賦」外4編の文章が収録されているものの、「芸経」は記載されていない。

李善註は古代の17路盤の存在を記した貴重な史料であるが、『芸経』の李善註以外の部分が遺されていないかを検策してみる。

明代の叢書『説郛』には邯鄲淳の『芸経』が収録されている²²⁾。然し、その内容は「碁道」と題して李善註がそのまま採録され、「碁品」と題して北宋の張擬の作成した『碁経十三篇』中の「品格篇」第12の文章がそのまま記載されている。又、邯鄲淳の『芸経』は清代の『玉函山房輯佚書』にも収録されているが、その内容は李善註の文章である²³⁾。

このようにみると、邯鄲淳の『芸経』は李善註にある文章を除いて唐代に既に亡佚したものと考えられる。

17路盤の存在は『文選』の李善註を通じて知られており、北宋の沈括（1031～95年）の『夢溪筆談』巻18技芸²⁴⁾、明の謝肇淛（1567～1624年）の『五雜俎』巻6人事²⁵⁾で

中国最古の棋譜

は古代の17路盤を紹介している。更に清の銭大昕（1728～1804年）の『十駕齋養新録』巻19碁局²⁶⁾では17路盤に言及し、『忘憂清樂集』所収の「孫策対呂範」と「晋武帝対王武子」の2局は19路盤であるので、後人の仮托と推論している。

我が国では正徳3年（1713）寺島良安の著わした百科全書『和漢三才図会』巻17²⁷⁾で『五雑組』の17路盤の記事を紹介している。

17路盤から19路盤への移行の時期を論じたのは、京都大学で中国の歴史地理を講じた小川琢治（1870～1941年）の論文「支那に於ける囲碁の起源と発達」が最初である²⁸⁾。小川は囲碁の起源を易と関係づける古来の伝承²⁹⁾と、邯鄲淳の『芸経』にある17路盤の記事から原始碁盤は易と密接な関係のある「方64格」、即ち9路盤であったと推論し、原始9路盤を4面合せて17路盤が成立したと考察した。この推論が立証されるためには、原始9路盤の出土が待たれる。

小川は更に17路盤から19路盤への移行の時期を囲碁好きの梁の武帝の治世と推定した。

1952年3月、河北省望都県の漢墓から石製の17路碁盤と石榻が発掘された。民間の企業経営者で囲碁の起源の研究者小松田良平（1911～79年）は、「囲碁クラブ」に望都県漢墓出土の17路石製碁盤についての研究結果を発表した³⁰⁾。これによると、漢墓の成立は182年になる。

1959年、中国は河北省安陽豫北紗歴にある隋の張盛の墓を発掘し、その記録を発表した³¹⁾。これによるとその墓から陶瓷製19路碁盤が発掘された。被埋葬者の埋葬が594年になることも確認された。

この結果、考古学上の17路盤の下限は182年、19路盤の上限は594年となり、その間が412年間である。この間に囲碁好きの皇帝南朝宋の文帝が介在するので、碁盤規格変更の時期を梁の武帝の治世と論断する小川説にはリスクがある。

そこで碁盤規格変更の時期を文献上で検討してみる。

元嘉17年（440）南朝宋の武帝の4男劉義康が袁皇后の死を悼み、民間の歌謡を集めて『読曲歌』³²⁾を編纂した。その一節に「方局十七道」の句がある。

これによって文献上の17路盤の下限は440年となる。

19路盤の上限は、北周の甄鸞の『孫子算経』巻下³³⁾にある「今有棋局方一十九道」の句である。『孫子算経』の作成時は不明であるが、仮に北周最後の年としても上限は581年となり、変更の期間は141年に短縮出来る。

碁盤規格の変更は一個人に出来ることではなく、碁好きの皇帝が行ったと考えるのが妥当であろう。440～581年に在位した碁好きの皇帝としては、南朝宋の文帝（在位424～53年）と梁の武帝（在位502～49年）の2人がいて、誰が碁盤規格の変更を行ったかは、両者の人物比較・在位中の環境等から総合判断する必要がある。

南朝宋の文帝は単なる碁好きであり、碁盤規格変更の可能性のある期間は晩年の13年に過ぎない。又、最晩年は骨肉の争いに悩まされ、皇太子に暗殺された。碁盤規格変更の可能性は少ないと判断される。

梁の武帝は中国歴代の皇帝でも有数の博学多才で深く仏教を信仰しており³⁴⁾、『梁書』本紀第3に「六芸具閑・棋陞逸品」とあって³⁵⁾碁の技術も高く、「碁賦」³⁶⁾、「碁評要略」の著作もある。『南史』巻38柳惲伝に、「梁武帝好弈碁・使惲品定碁譜・登者二百七十八人・第其優劣・為碁品三卷・惲為第二焉。」とあり³⁷⁾、武帝が柳惲に命じて宮廷で碁を打つ廷臣287名の棋力を判定させ、現在でいう有段者名簿3巻を作成させたとある。棋力のランクは第一を最強者とした9段階制であり、判定者の柳惲は自身を第二に位置付けている。第一は空位か武帝を位置づけるかいずれかであろう。

このような状況から17路盤から19路盤への規格変更は梁の武帝によって行われたものと判断する。その時期は武帝の治世、即ち6世紀前半と考える。

従って、『忘憂清楽集』所収の3局の中で、対局者のはっきりしている2局は17路盤であるべきである。然し、19路盤で作成されているので、この棋譜は清の銭大昕が指摘したように19路盤移行以後に作成された偽作と判断される。

V. 唐代3局の検討

(1) 賈玄囟 唐待詔賈玄與楊希粲対局

この対局図を唐代の棋譜と判断することには、大きな問題がある。

『忘憂清楽集解説』（講談社1983年刊行）には「賈玄は唐の太宗の時の棋待詔・賜緋。」との註がある。

この註は上記の副題を正しいものとの前提に立った錯誤である。前記の如く、棋待詔は唐の玄宗が創始したことは『資治通鑑』の記述で明らかである。

唐代の棋待詔では、玄宗朝の韋珽・王積薪、順宗朝の王叔文、敬宗朝の王倚、宣宗朝

中国最古の棋譜

の顧師言・閻景實、僖宗朝の滑能が史書等に登場するが、賈玄という棋待詔は確認出来ない。

一方、棋待詔の制度は北宋に継承される。北宋の太宗は自ら詰碁を作成する程の好棋家であり、且つ棋力も強かったと考えられる。この太宗の囲碁の相手をしているのが棋待詔賈玄である。この太宗と賈玄に関する記事は、『皇宋事宝類園』巻50³⁸⁾、『湘山野録』中巻³⁹⁾、『石林燕語』巻8⁴⁰⁾や類書『事文類聚』前集 巻42にも収録されている。従って、唐棋待詔とあるのは、原著の誤りであり、宋棋待詔が正しい。

(2) 明皇詔鄭観音弈碁図

明皇とは唐の玄宗を謂う。玄宗は好棋家ではあるが、碁を打った史実を調べると『西陽雜俎』巻1⁴¹⁾及び『開元天寶遺事』⁴²⁾には「獶子乱局」と題して、形勢不利な玄宗に対して楊貴妃が子犬をけしかけて盤上の石を乱し、玄宗がその機智を喜んだとある。

この棋譜は白先であり、技倆の上の者又は身分の高い者が黒を持つとの慣行から当然玄宗が黒である。

この棋譜は打掛けとはなっているが、実質的には黒必敗の形勢であって、玄宗がこのような対局の棋譜採録を許すとは到底考えられない。

更に、鄭観音とは如何なる人物か不明であり、この棋譜は偽作と考えられる。

(3) 金花椀図 待詔閻景實與顧師言争著蓋金花椀一隻・閻景實白先顧師言黒勝一路

この棋譜は宣宗朝(846~59年)棋待詔同士の対局、謂わば当時の囲碁界の最高峰同士の対局で、この棋譜を偽作とする積極的な理由はない。

Ⅵ. 爛柯図の検討

中国の浙江省衢州市にある爛柯山は古名が信安山であり、爛柯伝説発祥の地である。爛柯は雅趣ある囲碁の別名として、中国は謂う迄もなく、日本でも好棋家の間では広く知られている。爛柯山に関する最近の研究書としては、『爛柯山志』がある⁴³⁾。これによると爛柯伝説に関する最古の記事は、東晋の太寧年間(323~25)に虞喜の著わした『志林』の次の文章である⁴⁴⁾。

「信安山有石室．王質入其室．見二童子方对棋．看之局未終．視其所執伐薪．斧已爛朽．遽歸鄉里已非矣。」

これに次ぐ記事は、斉の臧栄緒の『晋書補遺』にある文章で、内容は簡略化されている⁴⁵⁾。

「王質入山斫木．見二童困碁．坐觀之及起．斧柯已爛矣。」

中国では類書という百科全書があり、困碁に関する記事が纏めて収録されている。後世の類書で爛柯伝説の起源として引用されているのは、梁の任昉の『述異記』にある次の文章である⁴⁶⁾。

「信安郡石室山．晋時王質伐木．至見童子數人棋而歌．質因聽之．童子以一物與質．如棗核．質含之不覺飢餓．頃童子曰．何不去．質起視斧柯盡爛．既歸無復時人。」

『述異記』は『四庫全書』にも収録され、爛柯伝説を記載した古典として信じられて来た。

近代に至り、魯迅（1881～1936年）は『中国小説史略』で任昉の『述異記』の存在を否定し、『述異記』は本来斉の祖冲之の著作であるが、亡逸して遺文が残っているに過ぎないと論じた。その上で現行の任昉の『述異記』は唐宋人の作であると主張した⁴⁷⁾。

魯迅は一方、『古小説鉤沉』を著わし、先秦から隋に至る間の散逸した小説36種について、諸書中に引用された断簡を集めて復元につとめた⁴⁸⁾。

この中に祖冲之の『述異記』もあるが、爛柯伝説は含まれていない。

魯迅の両著は『唐宋伝奇集』『小説旧聞鈔』とともに魯迅の「古小説研究著作四種」と称され、中国古小説研究の金字塔として尊重されている。

魯迅の任昉の『述異記』を唐宋人の作とする主張は、「爛柯図」作成の時期を探るのに大きな手掛りを与える。「爛柯図」が唐以前の棋譜であると考えれば、任昉の『述異記』に拠らなくても、虞喜の『志林』や臧栄緒の『晋書補遺』に拠って「爛柯図」を作成することは可能である。

然し、唐以前では棋譜を採録する慣習が確立しておらず、今迄の検討でも『忘憂清楽集』所収の2局は偽作であり、1局も残っていないので、『志林』や『晋書補遺』を見て「爛柯図」を作成した可能性は極めて低い。

「爛柯図」は281手で終了しており、『忘憂清楽集』所収の棋譜では最長の手順であって、難解な手順も含まれている。

唐宋時代より技術水準の低い時代に創作されたとは考え難い。

中国最古の棋譜

そこで任昉の『述異記』が唐宋時代に作成されたとする魯迅の主張を手掛りに、「爛柯図」が創作された時期を解明してみる。

因みに、唐代初頭の類書『芸文類聚』には「爛柯伝説」はない。

次いで刊行された『白孔六帖』は、唐の白居易の編纂したものに北宋の孔傳が追録したものである。これには爛柯伝説に類似した次の記事がある。

「鞭爛鞍朽 異苑曰・有人乘馬山行・見洞裏二老翁樗蒲・乃以馬策莊地觀之・俄然馬鞭爛馬鞍朽也。爛柯與爛鞭事相類樵人也。」⁴⁹⁾

ここでは囲碁ではなく樗蒲が登場するが、内容は爛柯と同じ趣向である。

『異苑』は南朝宋の劉敬叔の著した志怪小説（怪奇譚を集めたもの）である。尚、樗蒲は南北朝時代に流行した盤上遊戯で、六博を改良した双六の一種である。樗蒲については、渡部武氏と寺田隆信氏の研究がある。^{50) 51)}

唐時代には爛柯伝説は知られていたものの、爛柯が囲碁の代名詞として使用される程浸透していなかったと考えられる。

北宋の初頭に刊行された類書『太平御覽』巻753には、爛柯伝説として『晋書補遺』の記事がそのまま採録されている。

南宋時代には類書の刊行が盛んになり、潘自牧の『記纂淵海』・祝穆の『事文類聚』・謝維新の『古今合璧事類備要前集』には、任昉の『述異記』の文章が書名を付されて収録されている。この類型は明代の類書に継承されている。

『忘憂清樂集』には唐代の棋譜が1局あるのみで、北宋時代の棋譜が13局も収録されている。北宋時代に囲碁が一層普及し、棋譜採録の慣習が定着しつつあったと云えよう。同時に偽作も少なからず登場したと考えられる。

これにより、「爛柯図」を北宋時代の創作と判断する。

従って、『忘憂清樂集』の中では、唐代の「金花椀図」を最古の棋譜と考える。

Ⅶ. 王積薪の「鳳池図」について

(1) 2種の「鳳池図」の出現

積極的に中国の棋書を購入している中で、次の2種の棋書に収録された王積薪の「鳳池図」に遭遇した。

- ① 『古今囲棋名彙選』 沈子丞編著 文物出版社 1981年 手数272 黒勝
- ② 『最佳古譜詳解』 邱鑫・陳新編著 人民体育出版社 1990年 手数204 黒勝

①については、初出が1942年で、1981年は再版である。

棋譜の出所について、①には江陰の王志賢の所蔵棋譜と記してあるが、②には記載がない。又、①と②の「鳳池図」は全く別の棋譜であり、①と②のいずれかが真作、他が偽作か、① ②ともに偽作かのいずれかになる。

「鳳池図」の真偽は最古の棋譜の判定に大きく影響する。「鳳池図」が真作の場合、その作成時期が玄宗の治世（712～56年）の後半になり、これが最古の棋譜となるからである。

(2) 「鳳池図」の伝承

「鳳池図」の初出は南宋鄭樵の『通志』であり、唐代に作成されたものが南宋に伝承されたことは明らかである。以後の伝承では『明史』『芸文志』には記載がないものの、明代に成立した目録学の専門書『国史経籍志』⁵²⁾には次のように伝承されている。

「齊高棋図二卷・囲棋九品序録五卷 范汪等・棋後九品序 一卷・囲棋勢二十九卷 晋 馬朗・建元永明棋品二卷 宋 褚思莊・九品序録一卷 范汪・天監棋品一卷 梁 柳暉・梁武棋評一卷・梁武棋法一卷・竹苑仙棋図一卷・棋図一卷 韋珽・棋訣一卷・囲棋品一卷 梁武・棋要訣一卷・弈棋經一卷・金谷園九局図一卷 唐 王積薪・金谷園九局譜一卷 徐鉉・鳳池図一卷 王積薪・棋本一卷・王延昭棋論一卷・劉仲甫忘憂集三卷・角局図一卷・応機子棋勢重元図一卷・諸家精選新勢一卷・太宗皇帝棋図一卷・図手網格一卷・囲棋故事一卷・尹洙棋勢二卷。」

ここで「鳳池図」が明代から清代、更には現代にまで伝承されているか否かを文献上で検索した。その文献を次に挙げる。

- ① 正史系 『清史稿』 卷153 「芸文志」 『清史稿芸文志拾遺』 下巻 2000年刊
- ② 全書系 『四庫全書総目提要』 卷114 「芸術類存目」 『統修四庫全書提要』 第11冊
- ③ 目録学系 『絳雲樓書目』 雜芸術部 『鄭堂読書記』 卷49 『千頃堂書目』 卷15
『天一閣書目』 子部 『八千卷樓書目』 卷11 『販書偶記』 正編卷10
続編卷10
- ④ その他 『前代弈譜目録』 清 鄧元鏞 『囲棋古譜大全』 上海古籍出版社

中国最古の棋譜

以上検索の結果、①～③の文献には「鳳池図」の記載はなく、④の『前代弈譜目録』に記載はあるものの、「以上見通志」との註記があり、『通志』の記事を転写しただけで、「鳳池図」の現存を確認したものでないことは明らかである。

(3) 「鳳池図」に関する近年の中国棋書の見解

中国では1985年頃から囲碁史に関する文献の刊行が散見され、1990年以降はかなり活発に出版されるようになった。然し、本格的な「中国囲碁史」の刊行は必ずしも多くない。

2種の「鳳池図」の中で、『古今囲碁名局彙選』所収の図は全く採りあげられていない。

『最佳古譜詳解』所収の「鳳池図」については、積極的に真作が伝承されたとの見解と、単に『通志』に「鳳池図」ありと紹介する態度に分かれる。

① 真作であると積極的に認める立場

イ．『囲碁史話』李松福 人民体育出版社 1990年

「鳳池図」を王積薪創作の全局図で、盛唐時の高水準の棋譜と紹介し、不鮮明ながら『最佳古譜詳解』所収の「鳳池図」が記載されている。この棋譜は版本に収録され、右の欄外に「第十七局」と記してあって、一連の著名な歴史的な古棋譜の収録が推定出来る。但し、この棋譜を収録した棋書名・編著者・刊行時期等は全く記載されていない。

ロ．『中国囲碁史』張如安 團結出版社 1998年

「鳳池図」は現存する王積薪の唯一の対局譜で、204手黒勝ちと記している。

② 『通志』に「鳳池図」ありとの紹介的な立場

イ．『中国囲碁史』指定教材教師用 蔡中民・劉善承他 中国統計出版社 1999年

「鳳池図」については、「鄭樵『通志』有「鳳池図」一卷・王積薪撰。」と記してある。

ロ．『中国囲碁史』劉善承 成都時代出版社 2007年

イと全く同文が記載されている。

ここで2種の「鳳池図」の真偽を検討してみる。

第一に「鳳池図」の初出は南宋時代の『通志』であるが、『通志』に収録された棋書の大半が明代まで継承されたであろうか。『通志』の転写の部分が多いのではないかの疑問がある。

現在の中国の棋書には「鄭樵『通志』有「鳳池図」一卷」とあり、「焦竑『国史経籍志』有「鳳池図」一卷」とはなっていない。

第二に明代の棋書目録にあったものの、清代には全く姿を見せなかった「鳳池図」が、20世紀中葉から末にかけて2種も登場したことは、唐突且つ不自然であり、その信憑性に疑いを持つ。

第三に中国では史実に拠った棋譜の偽作や創作は、「爛柯図」のように珍しくない。

このような状況から、2種の「鳳池図」はいずれも偽作であると考えられる。

VIII. 結語

以上の検討の結果、中国最古の棋譜は『忘憂清楽集』上巻に収録された唐宣宗朝の「金花椀図」であると判断する。

棋待詔同志の対局で、長手順1目差の勝負は棋譜の内容からも名局と評価され、北宋時代まで伝承されたのであろう。

ここまでの考察の過程で、いくつかの偽作に逢着した。

このような偽作はどのような経緯で登場したのであろうか。

囲碁は唐代に琴棋書画として士大夫、即ち知識階級の習得すべき技芸としての地位を占めた。

北宋時代になると囲碁の本質・構造についての関心が深まり、囲碁論が多く作成され、その内容も多角的になった。代表的な著作は張擬の『碁経』であり⁵³⁾、囲碁の本質・戦術等基本的な問題が体系的に論ぜられている。

この結果、囲碁は単なる盤上遊戯ではなく、易や天文・陰陽五行等の哲学に立脚しており、戦略や治国の提要にも通ずる一つの文化と認識されるようになった。

これにより、囲碁は士大夫の間に社交手段として一層普及し、技倆水準も向上して棋譜の採録が定着した。

同時に歴史上の記述を主題とした棋譜の創作が行われるようになったと考えられる。

創作者としては偽作という認識が希薄で、戯作、更には囲碁を素材とした知的遊戯という感覚であったと推測する。

後世の棋書の編纂者が、残された棋譜の真偽を確認せずに収録したため、偽作が多く

中国最古の棋譜

記載されたと考える。

唐代に作成され、少なくとも南宋時代までは伝承された王積薪の「金谷園九局図」「鳳池図」が亡逸したことは、誠に遺憾である。

〔註〕

- 1) 『忘憂清樂集』全3巻 北宋 李逸民 古逸叢書三編之一 中華書局 1982年 據北京図書館南宋刻本原大影印 『忘憂清樂集解説』吳清源外 講談社 1983年 『忘憂清樂集』中国 林 勉復校 中国囲碁古譜大系 上海文化出版社1996年
- 2) 『隋書』巻34「経籍志」唐 長孫無忌『二十五史』中国古籍出版社 1986年
- 3) 『三国志』「呉書」第1「孫策伝」西晋 陳壽 南朝宋 裴松之註『二十五史』 邦訳『三国志』Ⅲ「呉書」第1「孫策伝」小南一郎訳 筑摩書房 1989年
- 4) 『三国志』「呉書」第11「呂範伝」西晋 陳壽 南朝宋 裴松之註『二十五史』 邦訳『三国志』Ⅲ「呉書」第11「呂範伝」小南一郎訳 筑摩書房 1989年
- 5) 「支那目録学」内藤虎次郎『内藤湖南全集』第12巻 筑摩書房 1970年
- 6) 『世説新語』「方正第五」南朝宋 劉義慶 梁 劉孝標註 叢書集成第8冊 邦訳『世説新語』中目加田 誠 新釈漢文大系77 明治書院 1976年
- 7) 『梁書』巻50「陸雲公伝」唐 姚思廉・魏徵『二十五史』
- 8) 『敦煌石室本碁経』 原本 大英図書館 影印本 東洋文庫外 『敦煌碁経箋証』中国 成恩元 蜀蓉棋芸出版社 1990年 構成・碁経7編(初編は題字と初3行欠)・碁病法 碁法 梁武帝碁評要略
- 9) 『旧唐書』巻47「経籍志」五代後晋 劉昫『二十五史』
- 10) 『新唐書』巻59「芸文志」北宋 欧陽修『二十五史』
- 11) 『資治通鑑』巻217「唐紀」33 北宋 司馬光 活字本『資治通鑑』下冊 国学基本叢書 台湾文化圖書公司 1971年 玄宗至道大聖人大明皇帝 下之下 十三載 「上即位・始置翰林院。密邇禁廷。延文章之士。下至僧道書画琴碁數術之士。皆處之。謂之待詔。」
- 12) 『通志』巻69「芸文略」第7 南宋 鄭樵 四庫全書645 上海古籍出版社
- 13) 『宋史』巻207「芸文志」160「芸文」6 元 托克托『二十五史』
- 14) 『崇文總目』巻33 北宋 王堯臣等 四庫全書674
- 15) 『歷朝奕事輯略』 清 鄧元鋹『弈潛齋集譜初編』中国歴代囲碁棋譜22 北京図書館出版社 2004年 『歷朝奕事輯略』訳註 1~14 森 収軒「棋道」1964年11月~65年12月号
- 16) 『南齊書』巻46「蕭惠基伝」梁 蕭子顯『二十五史』
齊(476~502年)は南朝宋を継承した王朝であるが、両朝間の政權交代は禪譲によるものであり、両朝に仕えた廷臣も少なくない。齊の正史は、6世紀後半北朝に成立した北齊の正史『北齊書』と区別するため『南齊書』と名付けられている。『南齊書』には南朝宋時代の記述が混在するので、注意を要する。
- 17) 『宋書』巻54「羊玄保伝」梁 沈約『二十五史』
- 18) 『晋書』巻3「武帝紀」唐 房玄齡・李延壽『二十五史』
- 19) 『語林』東晋 裴啓 玉函山房輯佚書 第92冊 清 馬国翰編
- 20) 「古代中国の遊戯と賭博」上下 寺田隆信「月刊百科」1993年3~4月 平凡社
- 21) 『六臣註文選』梁 昭明太子蕭統撰 唐 李善・呂延濟・劉良・劉銑・呂尚・李周翰註 四庫全書1331
『文選』1(文章編)小尾郊一 全釈漢文大系26 集英社 1974年
- 22) 『芸経』三国魏 邯鄲淳 重較說郭第102 元 陶宗儀編 明 陶珽重校 說郭三種(八)上海古籍出版社 1988年
- 23) 『芸経』三国魏 邯鄲淳 玉函山房輯佚書 第95冊 前掲書

- 24) 『夢溪筆談』 卷18 北宋 沈括 津逮秘書第15集 邦訳 『夢溪筆談』 2 梅原 郁訳註 東洋文庫 平凡社 1979年
- 25) 『五雜俎』 卷6 人事部2 明 謝肇淛 筆記小説大観8編 邦訳 『五雜俎』 3 岩城秀夫訳註 東洋文庫 平凡社 1997年
- 26) 『十駕齋養新録』 卷19 碁局 清 錢大昕 潜研堂全書第23冊
- 27) 『和漢三才図会』 下 寺島良安 翻刻本 東京美術 1970年 『和漢三才図会』 4 島田勇雄 竹島 淳夫 樋口元巳訳註 東洋文庫 平凡社 1986年
- 28) 「支那に於ける囲碁の起源と発達」 小川琢治 「支那学」 第6巻第3号・第7巻第1号 弘文堂書房 1932年7月・1933年5月
- 29) 後漢時代には囲碁の本質に関する論考がはじめて作成され、その作品には班固の『弈旨』・馬融の『囲碁賦』・李尤の『囲碁銘』等がある。『弈旨』には「碁有白黒・陰陽分也。」の句があり、『囲碁銘』には「局為憲矩・碁法陰陽・道為経緯。」の句がある。
- 後漢時代は儒教が国教となり、その基本文献が整理され、詳細な註釈書が作成された。『易経』は「五経」の一つとして尊重されており、「陰陽」はその根幹となっている。易の卦は64個であり、古代の17路盤は外周の交点（石の置ける点）も64で一致する。後漢時代の字書『説文解字』では、囲碁を意味する語は弈である。漢字を発音別に分類したものととしては「四声百六韻」があり、易と弈が「入声陌韻」となっていることも両者の関係を示唆する。
- 北宋時代になると後漢時代に次いで幾つかの囲碁論が登場するが、内容はより精緻となっている。この間に碁盤は17路から19路となり、外周の交点も64から72となっているが、『礼記』月令第六及び『呂氏春秋』十二紀にある歳時記中の72候に比定している。
- 明の嘉靖4年（1525）に林應龍の作成した『適情録』には易との関連についての囲碁論が収録されている。同書の第20巻には、「五音諧律呂局」「五行協歴紀局」等の7図が掲載されている。『適情録』は小川が最晩年に入手したが、小川の子息貝塚茂樹は1980年原本を提供し、刊行委員会が発足して『適情録』全20巻を翻刻し、解説書2巻を付して組本社から刊行した。第20巻は中国人の易の研究者景嘉が解説している。明の萬曆37年（1609）汪廷訥が著わした『坐隱先生訂譜全集』土巻では、「弈易辨」で両者の関係が論ぜられている。
- 30) 「中国最古の棋盤について」 小松田良平 「囲碁クラブ」1960年7月
- 31) 「安陽隋張盛墓発掘記」 中国 考古研究所安陽発掘隊 「考古」1959年10期 考古編集部 科学出版社
- 32) 「讀曲歌」 南朝宋 劉義康編 『楽府詩集』 卷46 北宋 郭茂倩 四部叢刊 初編 集部 據汲古閣 本景印 民国 張元濟編 上海商務印書館 1919年 『囲碁文化詩詞選』 中国 蔡中民選註 蜀蓉 棋芸出版社 1989年
- 33) 「孫子算経」 卷下 北周 甄鸞 知不足齋叢書第4集
- 34) 『梁の武帝』 森 三樹三郎 サーラ叢書 平楽堂書店 1956年
- 35) 『梁書』 「本紀第3 武帝下」 前掲書
- 36) 「全梁文」 卷1 『全上古三代秦漢三国六朝文』 7 清 嚴可均 台湾 世界書院
- 37) 『南史』 卷38 柳惲伝 唐 李延壽 『二十五史』
- 38) 『皇宋事宝類苑』 卷50 南宋 江少虞
- 39) 『湘山野録』 中巻 北宋 積文塋 学津討原第17集
- 40) 『石林燕語』 卷8 南宋 葉夢得 四庫全書863
- 41) 『西陽雜俎』 卷1 唐 段成式 四庫全書1047 邦訳 『西陽雜俎』 1 今村与志雄 訳註 東洋文庫 平凡社 1980年
- 42) 『開元天宝遺事』 五代後唐 王仁祐 四庫全書1035
- 43) 『爛柯山志』 爛柯山志編纂領導小組編 浙江人民出版社 1998年
- 44) 『志林』 東晋 虞喜 重較説郭 第59 説郭三種(五)
- 45) 『晋書補遺』 齊 臧榮緒 廣雅局叢書晋書輯本
- 46) 『述異記』 梁 任昉 四庫全書1047
- 47) 『中国小説史略』 1 魯迅 中島長文訳註 東洋文庫 平凡社 1997年

中国最古の棋譜

- 48) 『古小説鉤沉』 魯迅校録 齊魯書社 1997年
- 49) 『白孔六帖』 卷33 博碁 唐 白居易・北宋 孔傳 四庫全書892
- 50) 「中国古代の盤上遊戲」 渡部武 「月刊百科」1981年11月 平凡社
- 51) 「樗蒲考」 上下 寺田隆信 「月刊百科」1994年6月・8月 平凡社
- 52) 『国史経籍志』 卷4下 明 焦竑 粵雅堂叢書初編第5集
- 53) 『碁経』 北宋 張擬 重較説郭 第102 説郭三種(八) 守山閣叢書 『碁経』は『孫子』に準じて13篇で構成されているので、別名『碁経十三篇』とも云われ、後世の版本では多くの註記がなされて、バイブル視されている。

近年、『碁経』の多くの異本を比較考証したものとして、次の著作がある。

- 『碁経十三篇校注』 中国 李毓珍 蜀蓉棋芸出版社 1988年
北宋時代に成立した主な囲碁論は、次の通りである。
- 『囲棋義例銓釋』 北宋 徐鉉 重較説郭 第102 説郭三種(八)
『弈棋序』 北宋 宋白 宋文鑑 卷85 南宋 呂祖謙
『碁説』 北宋 韋讓 韋先生集 卷18 叢書集成統編
『碁経訣』 北宋 黄庭堅 黄文節公別集 卷11
『碁訣』 北宋 劉仲甫 重較説郭 第102 説郭三種(八)
「觀碁大吟」「觀碁長吟」 北宋 邵雍 伊川擊壤集 卷1 卷5

収録棋譜

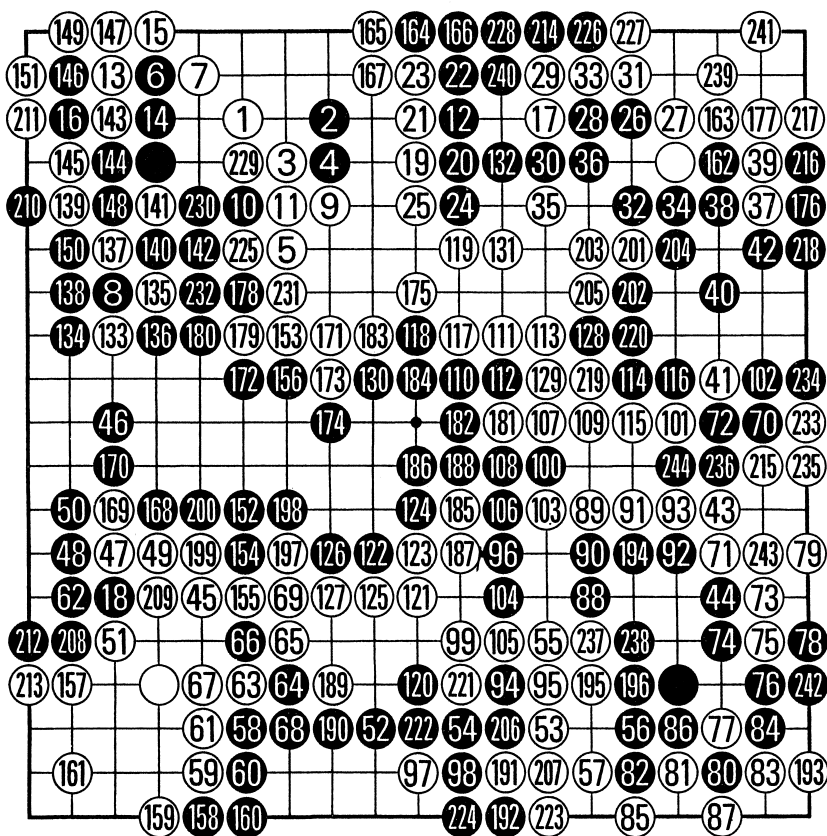
1. 中国最古の棋譜 「金花椀図」

待詔閻景實與顧師書，爭著蓋金椀一隻。

閻景實白先，顧師言勝一路，各一百二十二路。

黒殺白六子，白殺黒六子
黒有四十路，白有三十九路

(1~244)

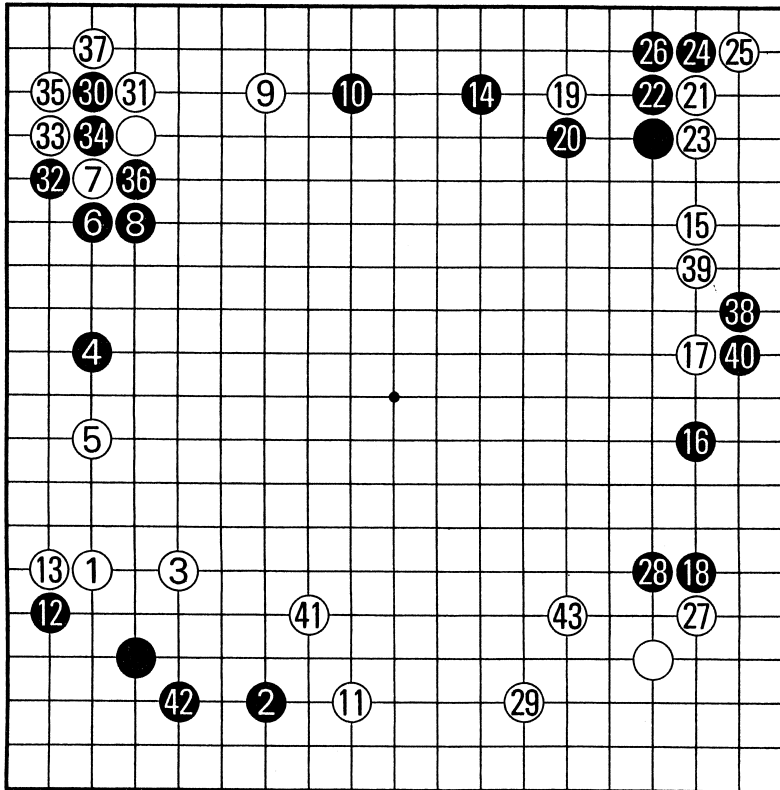


中国最古の棋譜

2. 参考棋譜(1) 「孫策詔呂範弈碁局面」

共四十三着 分局面停

(1~43)

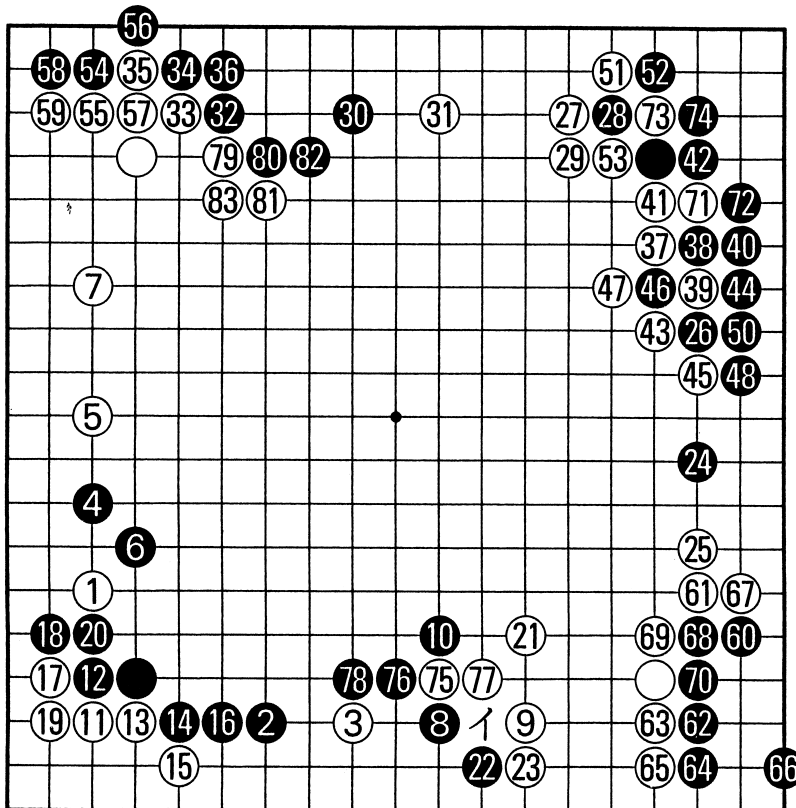


3. 参考棋譜(2) 「晋武帝詔王武子弈碁局面」

共八十三着 分局面停

㊤ 劫取る(39)

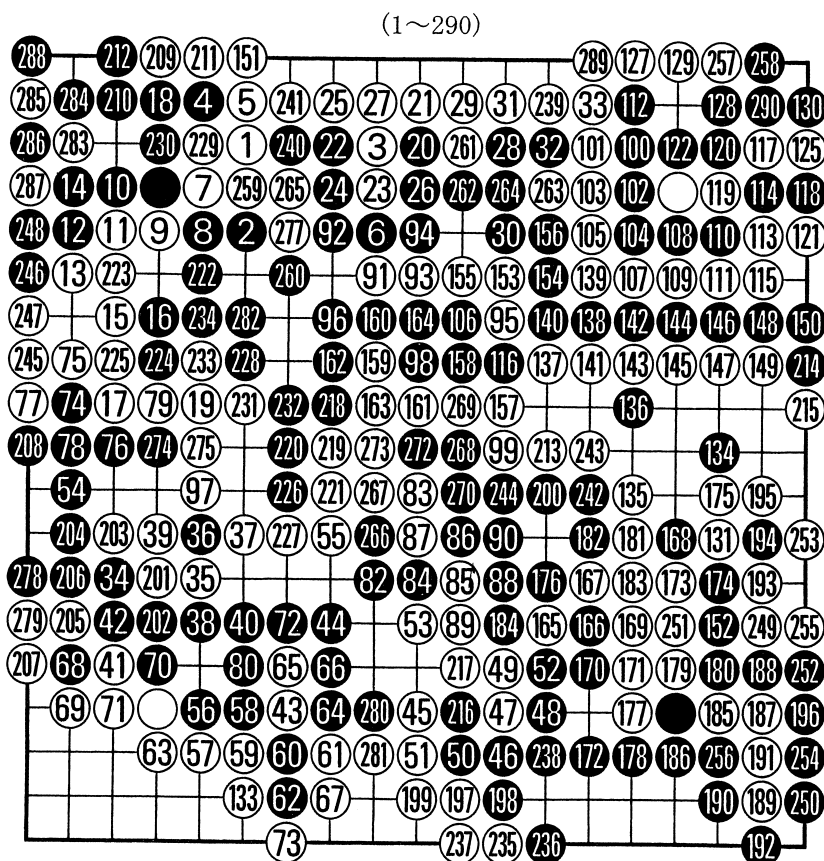
(1~83)



4. 参考棋譜(3) 「爛柯図」

昔王質入衢州爛柯山採樵遇神仙。
 弈碁乃記而傳於世。白先黒勝一路。
 黒殺白二十二子 白殺黒九子
 黒有十八路 白有十七路

- ㉑ 打欠く(43) ㉒ 同(119) ㉓ 取る(119の左)
- ㉔ 継ぐ(119) ㉕ 取る(65) ㉖ 二子取る(65)
- ㉗ 取る(43)



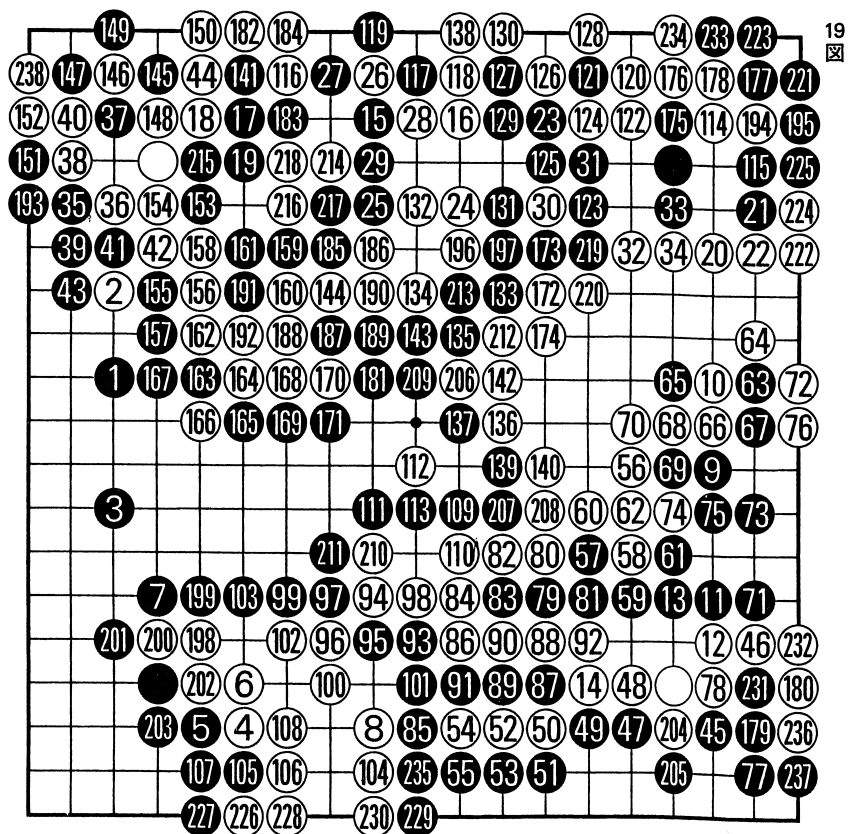
唐待詔賈玄與楊希榮對局。

賈玄黑先希榮輸八路。各一百十九着

白殺黑二十一子 黑殺白九子

白有四十三路 黑有五十一路

(1~238)

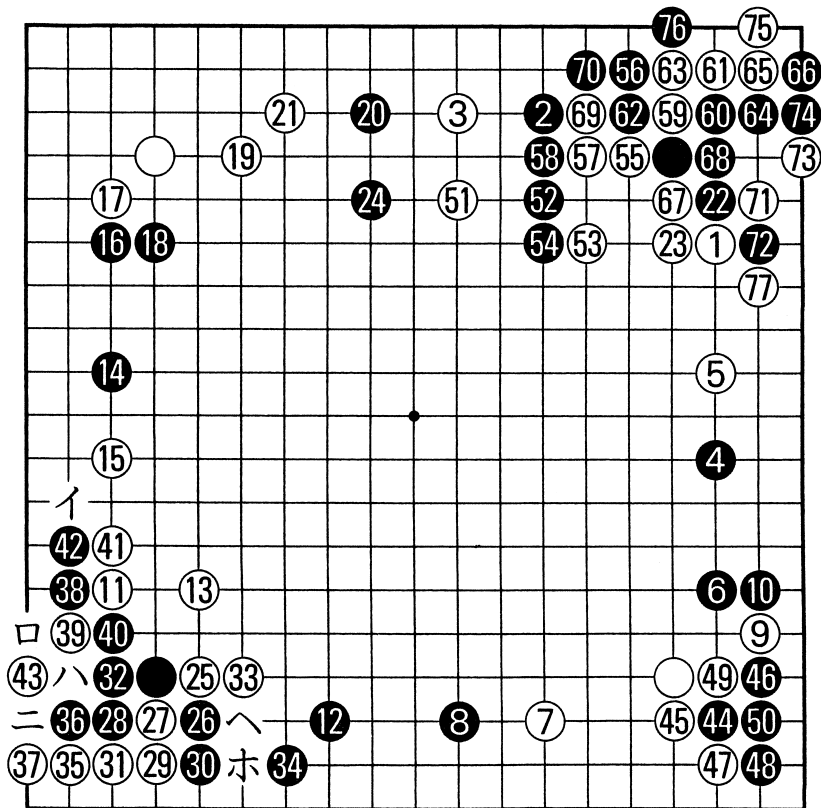


中国最古の棋譜

6. 参考棋譜(5) 「明皇詔鄭観音弈碁局面」

共七十七 分局面停

(1~77)

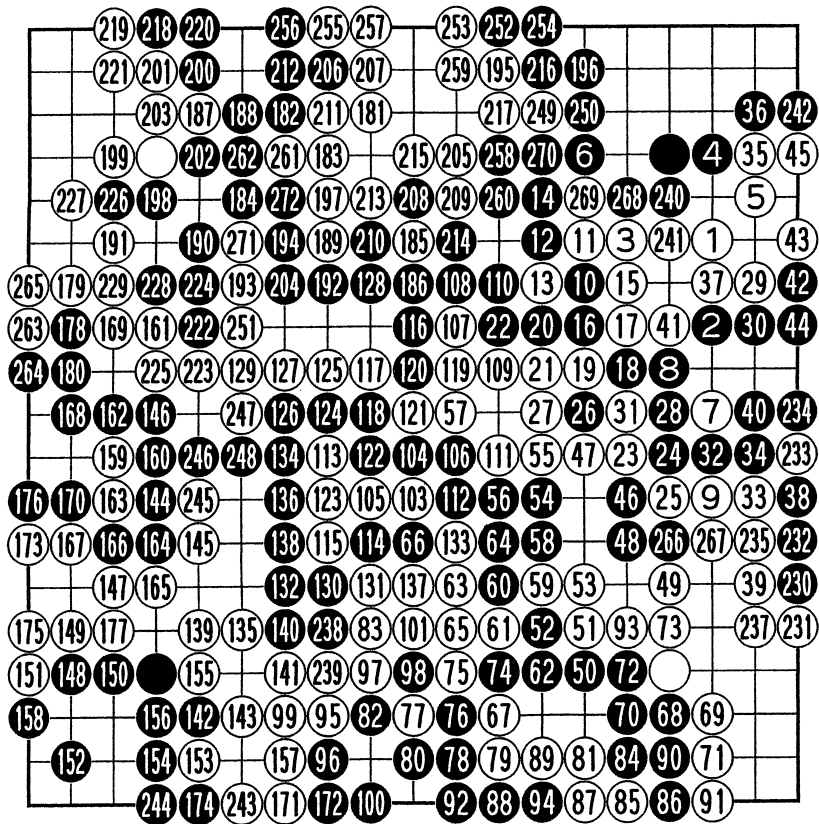


7. 参考棋譜(6) 「鳳池図」①(傳 王積薪)

黒 4 目勝

102 継ぐ(77) 236 継ぐ(233)

(1-272)



8. 参考棋譜(7) 「鳳池図」②(傳 王積薪)

- ⑭② 継ぐ(137) ⑰⑦ 劫取る(66) ⑰③ 劫取る(167) ⑰⑥ 劫取る(66)
⑰⑨ 劫取る(167) ⑰② 劫取る(66) ⑰④ 継ぐ(167)

(1-204)

